

## 2023年度第1回入学試験問題

### 国語

「始め」の合図があるまでは問題を見てはいけません。

#### 注意

- 1 「始め」という合図で始め、「やめ」という合図で、すぐに鉛筆をおきなさい。  
問題は2ページから8ページまでです。
- 2 解答用紙は問題冊子にはさまれています。
- 3 初めに、解答用紙に受験番号・氏名を記入しなさい。
- 4 答はすべて解答用紙に記入しなさい。
- 5 文字は楷書かいしょで、一点一画ていねいに書きなさい。
- 6 質問や用があるときは静かに手をあげなさい。
- 7 字数制限のある問題については、かぎかっこ・句読点も一字と数えなさい。

# 一 次の文章A・Bを読んで、後の間に答えなさい。

## 文章A

僕の家族

僕の家には、お父さんが一人いる。お父さんとタケパパだ。

お父さんが一人いるので、お母さんはいない。だから僕の家は三人家族だ。

二人のお父さんのうち、一人は僕の本当のお父さんだが、もう一人は本当のお父さんではない。本当のお父さんのほうは、僕が生まれたときから一緒に住んでいた。そこに新しいお父さんがやつて来たのだ。でも、いつやつて来たのかは、はつきりとは覚えてない。僕が小さかつたからだ。

お父さんは新しいほうのお父さんことを「タケシ」と呼ぶので、昔、僕もそう呼んだことがある。そしたら、新しいほうのお父さんはとても怒った。それで「タケパパ」と呼ぶことにした。

お父さんはサラリーマンだが、タケパパは家にして、ご飯を作つたり掃除をしたり洗濯をしたりしている。タケパパの作るご飯はとてもおいしい。タケパパは料理のプロだ。

お母さんは僕が小さかつたころに死んでしまった。僕は残念だがよく覚えていない。だけど、お母さんがどういう感じの人なのかなは、なんとなく分かる。タケパパには齊藤さんという女の友達がいて、齊藤さんが家に遊びに来るとき、僕はときどき「お母さんってこういう感じなのかな」と思う。

齊藤さんはとてもいい人で、僕の宿題を見てくれたりする。今日は齊藤さんと一緒にハンバーグを作つた。とても楽しかつた。

僕は一人つ子なので兄弟がない。お父さんも一人つ子なので、僕には従兄弟もいない。時々、弟か妹がほしいな、と思うことがある。でもそれをお父さんに話したことはない。だけど、僕にもいつか弟か妹ができるのではないか、と僕は想像している。タケパパも僕のお父さんだから、タケパパの子供は、僕の兄弟になるからだ。

弟や妹ができたときには、きっと一緒に住めないと思う。でも、一緒に住んでいなくても家族だと僕は思う。

できたのは、憲弘のおかげだった。憲弘は物凄い目つきで父親を見みつけていたのである。

美佳子がふたたび泣き出しそうな顔になつたのを見て、毅は英弘に向かつて言つた。

「おまえは黙つて席につけ」

英弘もやつとのことで、なんとなく何が起きたのかを察知しはじめたらしく、言われたとおり黙つて食卓の席についた。

毅は台所に入り、レンジの上に他にも鍋がふたつ載つていて、鍋の中身はハンバーグにはつきものの粉ふき芋、それからインゲンとニンジンのソテーだった。粉ふき芋のほうはこのままでどうにか行けそうだ。

—— そうそう、これつて小学校の家庭科で習うんだよな……。

「おいノリ、メシついでくれ」

習慣になつた台詞を台所から言うと、慌てたように美佳子が答えた。

「うん。じゃ頼むよ」

それでも憲弘は台所に入つてきて、美佳子に向かつて言つた。

どの茶碗が誰の茶碗なのか判らないであろう——最悪の想像をすれば味噌汁の椀に米飯をよそつてしまふ可能性すらある——美佳子を気遣つての行動であることが、毅には判つた。

「ありがと……」

美佳子は悄然として答え、憲弘は手早く三つの茶碗を食器棚から取り出しながら言つた。

「サイトウさんはお客様にするね！」

美佳子は悄然としながら、かつてはハンバーグであつたのである。ただ実際に泣き出さんばかりの声で美佳子がそう言い、憲弘は自分の役割を把握したらしい、毅に向かつて美佳子をかばう口調になつて言つた。

憲弘がやつて来て、その「挽き肉炒め」を呆然とした表情で見つめた。そんな憲弘に向かつて、美佳子が泣きそうな声で言う。

「ノリくん！ これ、ちゃんとハートの形してたんだよね!?」

「う、うん……」

「証明してくれるよね!? ハート形してた、つて」

「ホントにハート形してたんだよ、タケツパー！」 一緒に作つたんだもん！」

挽き肉の成形を、ふたりでやつたのだろう。美佳子がどういう訳でいきなり「ハンバーグをハート形に成形する」などという難しいことにチャレンジしようとしたのかは判らないが、成形後の挽き肉を焼いたときに何らかの失敗があつたのか、あるいは成形そのものの時点では失敗があつたのだろう。

まあとにかく、ハンバーグの形はしていないが、炒めた挽き肉である。少なくとも、食べられないものではない。だから毅は言つた。

「大丈夫だよ、食えるよ、充分」

そう言う毅のすぐ隣りで、憲弘が物凄い勢いで首肯している。

—— 親が言うのもなんだけど、ノリつてすぐえいい子に育つてるとんでもないよ、食えるよ、充分」

「あれ？ ハンバーグじやなかつたんですか？」 予定変更？ これは何ていふ料理なんですか？」

1 その場で英弘の首を絞めあげたい、という突発的な欲望を止めることが

誰かの結婚式の引き出物で英弘がもらつてきた、上等の京焼き茶碗セットがあり、それを憲弘は「お客様さま用」と呼んでいた。憲弘は「お客様さま用」を含めて四つの茶碗を炊飯ジャーの前にいる美佳子に渡す。美佳子は肩を落としてジャーから米飯をよそつた。

「オレンジ色にまみれたインゲンのソテー」を大皿に移しながら片目でジャーの中を盗むように見てみたが、飯はふつうに炊けていたようだつた。それだけでも奇跡としよう、と毅は思う。

食卓に「挽き肉炒め」と「オレンジ色にまみれたインゲンのソテー」と粉ふき芋と米飯が揃い、四人は席についた。

「じや……」

英弘が言い、それが合図だつたかのように四人で「いただきます」を唱えた。

悪い予感ほどの中することになつてゐる。「挽き肉炒め」には味がなかつた。それでも英弘と憲弘は黙々と味のしない「挽き肉炒め」を口に運んでいるが、毅は黙つていればいるほど他でもなく美佳子本人の気持ちが傷つくのではないか、と思い、笑つてしまふことにした。

「美佳子さん！」

笑いながらそう言つた。わざと「さん」を付けた。美佳子が観念したような顔になる。

「はい……」

「美佳子さん、下味に何を使いました？」

美佳子は今度はぎよつ、とした顔になり、果たして言つた。

「したあじ……、つて何……？」

そのことばを聞いて、毅はもう純粹に笑つた。つられたように美佳子が情けない感じで笑い出し、そのことによつて英弘と憲弘もようやく笑顔を見せた。毅は言つた。

「しゃぶゆかけよう、醤油。な？」

「と、提案しようとあたしも思つていました」

美佳子がそう告白し、憲弘がそれでもどこか取りなしてゐるようだ。

「醤油つて便利だよね、こういうとき」

憲弘のその台詞で、全員が盛大に笑った。食卓を包む笑い声の中で、毅は静かに決心した。将来もし美佳子と一緒に住むようになるとになったとしても、料理だけは俺が担当しよう、と。

醤油味になつた「挽き肉炒め」を食べながら、美佳子はどうか諦念の漂う呟きを洩らした。

「あたしつて、つくづく料理にムイでないんだわ……」

「誰にだつて向き不向きはありますよ。俺だつて家事能力ゼロだし。コイツに捨てられたら、明日着る服だつてないんすから」

英弘が毅のほうを額で指すようにしながら言つた。捨てられる、などといふ言い方が可笑しくて毅は腹の中で笑つたが、美佳子は納得できないよう言い返した。

「2でも、ヒロさんは男のヒトだもの……」

美佳子のことばに對しては、英弘はあつさりと、とても軽快に言つた。

「カンケイないんじやないっすか」

「え……？」

「男とか女とか、そういうことカンケイない時代だと思ひますよ、俺」

「カンケイない……？」

「ええ。自分が向いてない分野のことは、向いてるヒトに任せる。その代わり、自分は自分が向いてる分野で役に立つ。それでいいんじやないっすかね」

メシをかつこみながら英弘はそう言い、美佳子はしばらくのあいだ箸を動かす手を休めた。

「それつて……」

「それつて……、あたしが前から考えてたこととすごくよく似てます……」

男とか女とかそういうことに関係なく、「外で働いて稼いでくる人」と「家の中の仕事を担当する人」が一緒に住んでいるのは羨ましい、とかつて美佳子が言つていたのを毅は思い出す。

「でも、そういうコト口に出して言うと、それは『フツーじゃない』みたい

なこと言われちやうんですよね……」

一瞬、食卓に静寂が流れた。

小学校六年生の真剣なその呟きを聞いて、4大人三人は涙が出るほど笑つた。

(鷺沢萌「渡辺毅のウェルカム・ホーム」)

『ウェルカム・ホーム!』[新潮社] より)

問1 傍線部1 「その場で英弘の首を絞めあげたい、という突発的な欲望を止めることができた」とあります。次の文はこの時の毅の心情について説明したものです。文中の□iに入ることばを文章Bから十字以上十五字以内で書き抜き、□ii・iiiに入ることばの組み合わせとして最もふさわしいものを後の選択肢から選び、記号で答えなさい。

- A ii—あわれみ iii—頭を冷やす  
B ii—不満 iii—意気投合する  
C ii—憎悪 iii—うつぶんを晴らす  
D ii—あきらめ iii—心をなごます  
E ii—非難 iii—怒りを抑える

問2 傍線部2 「でも、ヒロさんは男のヒトだもの……」とあります。この時の美佳子の心情はどのようなものですか。文章Bの中のことばを用いて、解答欄に合うように、四十字以上五十字以内で説明しなさい。

男の英弘はたとえ家事能力がなくてもおかしくはないが、「四十字以上五十字以内」と感じている。

問3 □Xに入ることばとして最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

いみじくも毅は、憲弘の作文を読んでしまつたあのとき、英弘に向かつて言つたものだ。  
——だつてこれ、フツーのヒトが読んだら……！  
そうしていみじくも英弘はそのあとに言つたものだ。  
——別に「いちおう父子家庭」じゃねえよ。「ちゃんとした父子家庭」だよ。

毅の口が自然に動いた。

「フツー、とかさ。ちやんとしてる、とかさ……」

三人の目が自分のほうを向いたのを感じる。

「そういうの、もういいじやん。□X

美佳子が物問いたげな視線を寄越しながら言う。

「たとえば女なのにハンバーグひとつ満足に作れない美佳子はフツーか？」

「フツーじゃない、と自分では思う」

「俺は全然フツーのこととして受け容れられるぞ」

「ホントに？」

美佳子が泣き笑いみたいな顔になつて頷き、毅は続ける。

「男なのにシュフやってる俺はフツーか？」

「……」

「自分ではフツーじゃないって思つてたけど、美佳子はフツーに受けとめてくれてるだろ？」

「うん……」

「七年も前に妻に先立たれてるのに、再婚しようともしないでオトコに家事と育児任せてるヒロはフツーか？」

それには英弘が即座に明るく答えた。

「フツーじゃないせーん！」

そうして父親のことばを聞いた憲弘は、かなり眞面目な口調で、それからなぜか少し残念そうに言った。

「3なんだ……、フツーなの僕だけなんだ……」

問4 文章Bからわかる英弘の人物像についての説明として最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

- A 人からは不羈だと思われることもあるが、偏見に惑わされず知的に物事の本質を見据えている。  
B 俺もフツーじゃないし、美佳子もフツーじゃないんだから、結局俺たちは譲れない信念を持つている。  
C 気分によつては相手に配慮することもあるが、基本は人に対する関心が薄く自由気ままに生きている。  
D 細やかな気づかいは得意ではないが、自分や相手のありのままを受け入れることができる。  
E 自らの至らない部分への自覚はあるが、それを変えることができず現状に対して開き直っている。

問5 文章Aからわかる憲弘の家族に対する思いや考えとして最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

A 実の父母とその子どもが暮らす家族の形にあこがれを感じている。  
B 自分の家族は他の平凡な家族よりもおもしろいと自慢に思つてている。

ウ 父親が二人いることに違和感を覚えているものの二人を好いている。

エ 家族構成や血のつながりにとらわれず家族に愛着をもつてている。

オ 母親が死んでしまった寂しさをいまだに埋めきれないでいる。

問6 傍線部3 「なんだ……、フツーなの僕だけなんだ……」とありますか、

文章Aもふまえ、この時の憲弘の心情について説明した選択肢として最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 自分の家族は「フツーじやない」と感じていたが、周りの大人たちも皆彼ら自身を「フツーじやない」と考えていたことを知り、うすうす感じていた事実を突きつけられることとなり、うろたえている。

イ 母親が亡くなつて以来、家の中の環境が変わっていくことを受け入れつづく「フツー」の家族になれるよう願っていたのに、自分たちは「フツーじやない」と開き直る大人たちの様子を見て、失望している。

ウ 自分たちのことを「フツー」の家族だと考えていたのに、自分以外の人たちは皆彼ら自身のことを「フツーじやない」というので、自身のことを「フツー」だと思つていたのは自分だけだと知り、とまどつている。

エ 「フツー」の小学生として、家族のために気をつかうのは「フツー」のことだと思い自分なりに頑張つてきたが、そんな自分を尻目に大人たちが好き勝手なことを言い出すのを目の当たりにし、呆然としている。

オ セめて実の父親には「フツー」であつて欲しいと願つていたにもかかわらず、英弘は自身を「フツーじやない」とあつさり認めてしまつたので、父親への思いが裏切られたように感じられ、悲しんでいる。

問7 傍線部4 「大人三人は涙が出るほど笑つた」とありますか、この時の「大人三人」に共通する心情を示したことばとして最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 優越感とさげすみ イ 感嘆と愉快 ウ 後悔とむなしさ  
エ 信頼と歓喜 オ 愛情とおかしみ

もどづいて押し戻してくる。この押し合いが続く間は、エコトーンとしての人里は維持される。

人里は心なごむ自然であり、人はそこに自然を見、そこから自然の論理を学ぶことができる。自然の論理を知ること——それは今日の人間にとつてきわめて大切な意味をもつていて。ぼくが「人里をつくろう」と訴えているのもそのためである。

では、人里をつくるにはどうしたらよいのか。それは人間の論理の無理押しをしないことである。自然が自然の論理で押し返してくるのを許すことである。

人間はしばしば自然の巻き返しを嫌い、自然の論理を徹底的につぶしてしまおうとする。道は完璧に舗装し、側溝は水を流す目的だけのためにコンクリートで固める。林の木の侵入を食い止めるため芝生にして、それを維持する。そしていかにも自然らしく見えるように植木を植え、その植木はこぎれいに剪定する。

このようにして生じるものは2人里ではなく、たんに擬似人里、人里もどきにすぎない。人里もどきには自然の論理ははたらいていない。わずかながらはたらくとしても、人間は人間の論理にしたがつて、自然が生やした草を刈り、虫を退治する。一見、自然のように見えて、そこに自然はない。徹底的に人間の論理で貫かれているからである。今、あちこちでつくられている「自然の森」や「水と緑の公園」は、そのほとんどすべてがこのようないい人里もどきであると言つてよい。

なぜそれがいけないのか？ それは人間が「自然界のバランス」を崩しているからだ、と考える人がいる。残念ながらそうではない。人間が「自然と共生する」姿勢を忘れているからだと言う人もいる。これも残念ながらあたつていらない。

「自然界のバランス」「自然と人間の共生」というようなことはよく言われる。いかにも人を納得させるひびきをもつたことばである。けれど、近年の動物行動学あるいは行動生態学の研究を見ていると、どうもそのようなものはわれわれの幻想にすぎなかつたのではないかという気がしてくる。

3昔の生態学は、自然界のバランス、生態系（エコシステム）の調和、と

二 次の文章を読んで、後の間に答えなさい。

1エコトーンは、環境の状態が移行する場所である。それはしたがつて広がるということはあり得ないのである。

人里はまさにこのようなエコトーンなのだ。人里の特徴、そして人里のもう一つ心なごむ景観は、人里がエコトーンであるがゆえに生まれるのである。

人が手を加えない自然の中で、エコトーンはつねにそれまでそこにあつたものだということである。

老木が倒れたり、雷で山火事が生じたりするかわりに、人間が住みついて林を切り開いても、同じような事態が生じる。そこには新しいエコトーンが生まれ、それまでの自然の再生のプロセスが始まる。

純自然の場合と異なるのは、人間がこの自然の再生を嫌い、つねにそれと闘つてきたことである。その結果、自然の再生は完成することなく続けられる。そして、人間のそれに対する闘いも続けられてきた。

この闘いが続いている間、エコトーンはもとの自然の再生による最終的な消滅に至ることなく維持される。この状態が人里なのである。人間はもとで利己的にふるまつてゐるように見える。かつて信じられていた「種族保存のためのシステム」というものもなく、個体がそれぞれ他人を蹴落としてもいいから自分だけは子孫を残そうと、きわめて利己的にふるまつてゐる結果として、種族が維持され、進化も起ころのである。「自然界のバランス」なるものも、そこになにか予定調和的なバランスがあつて、自然はそれを目指して動いている、というようなものではけつしてない。ある個体が自分の利己を追求しすぎると、そのしつப返しを受けて引き下がらざるを得ない。こういう形で結果的にバランスが保たれているにすぎないのである。

自然界に見られる「共生」についても同じような見方ができる。花と昆虫のみごとな共生に、われわれは心を打たれる。けれどこれも、花と昆虫が「お互いうまく生きていきましょう」と言ってやつていることではないらしい。花は昆虫に花粉を運んでもらえばよいのであって、つくるのにコストのかかる蜜など提供したくはない。昆虫は昆虫で、自分たちの食物である蜜を花からできるだけたくさんcウバえればいいのであって、花粉など運んでやるつもりは毛頭ない。

この両者の「利己」がぶつかりあつたとき、花はますます精巧な構造を発達させることになった。できるだけ少ない蜜を提供しつつ、なんとしても昆虫の体に花粉がついて、昆虫がいやでも花粉を運んでしまうような花の構造ができるあつてはいたのである。

人間も動物であるから、利己的にふるまうのは当然である。しかし、動物たちは利己的であるがゆえに、損することを極端に嫌う。浅はかに利己的にふるまいすぎてしつப返しを食つたときに、やつとそれをやめるのではなく、もつと「先」を読んでいるらしい。どのようにしてそれを予知するかわからないが、これはどうも損になりそうと思ったら、もうそれ以上進まないのである。その点では、動物たちのほうが徹底して利己的である。きわめて賢く利己的だと言つてもよからう。

5 人間はじつに浅はかに利己的であった。しかしこれからは自然が自然の論理であるまうのを許せるぐらいに「賢く利己的に」ふるまうべきではなかろうか?

(日高敏隆『日高敏隆選集Ⅷ 人間とはどういう動物か』)

〔ランダムハウス講談社〕より)

問1 傍線部 a～c のカタカナを漢字に直しなさい。

問2 傍線部1 「エコトーン」とあります、これはどのようなものですか。

最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 様々な環境が思われぬ外圧によって変化し、移り変わっていく場のことであり、時折自然の論理がはたらいている場である。

イ 人間が自然を開発した状態を言い、自然が人間の力を押し戻し、再生しようとして結果的に魅力的な外観を呈する場である。

ウ 新たな環境に移り変わる場であり、自然の状況でも人工的にも生じ得る、自然の再生と更新の場である。

エ 環境の移行と変化の場のことであり、かつては自然界の大部分を占めていたが、現在は著しく減少してきている。

問3 傍線部2 「人里ではなく、たんに擬似人里、人里もどきにすぎない」とありますが、「人里」や「人里もどき」について説明した選択肢として最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア いざれも自然の環境に人の手が入ったものだが、人里もどきでは自然の論理が破壊され、人工的で見せかけの自然のみが存在することになる。

イ 人里とは人間が自身のために作り上げた安らぎの場のことだが、いざれはエコトーンとなり純粹な自然に戻ってしまう。

ウ 人里もどきは、人間の都合のみで自然環境を破壊した結果生じた人工的なものだが、皮肉にも人間にとつて懐かしさを覚える環境となる。

問4 傍線部3 「昔の生態学」では、自然界をどのように捉えていましたか。本文中から三十字で探し、最初の二字を書き抜きなさい。

オ 人里はエコトーンとして人間に悲壮な感情を抱かせるが、人里もどきはエコトーンではあり得ず、幻想としての環境が現出されることとなる。

問5 傍線部4 「きわめて利己的にふるまっている」とありますが、ここでいう「利己的」とはどういう意味ですか。最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 自分たちの種族を保存するために、他の個体を蹴落とそうとすること。

イ 共生状態を維持するよりも、自分の快楽を優先しようとすること。

ウ 他者との共生をはかる一方で、自身の利益にならないことは決してしないこと。

エ 自然環境に配慮しないで、自身の幸福を最優先すること。

オ 他者の存在を顧みずに、個体それぞれが自身の子孫を残そうとすること。

問6 傍線部5 「人間はじつに浅はかに利己的であった」とありますが、なぜそのようにいえるのですか。解答欄に合うように、二十五字以上三十五字以内で説明しなさい。

動物たちとは異なり、人間は「二十五字以上三十五字以内」

2023年度 第1回	国語	受 験 番 号				氏 名	
---------------	----	------------------	--	--	--	--------	--

問 6 動物たちとは異なり、人間は	問 2 <input type="checkbox"/>	問 1 a  b  c  え ば	問 3 <input type="checkbox"/>	問 4 <input type="checkbox"/>	問 5 <input type="checkbox"/>	問 6 <input type="checkbox"/>	問 7 <input type="checkbox"/>	問 1 i  ii・iii  j
	25		二	50	と感じている。	10	40	一
35								

問2 男の英弘はたとえ家事能力がなくともおかしくはないが、

合計